歴史地理学　57－5（277）20-40　2015. 12

アイルランドにおけるフォークライフ研究
―野外博物館と鋤を中心に―

河　島　一　仁

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．フォークライフ研究と地理学
Ⅲ．アイルランド共和国におけるフォークロア研究と野外博物館の構想
Ⅳ．北アイルランドにおける野外博物館の創設
Ⅴ．鋤に関する研究史
(1) エミール・エスティン・エヴァンス
(2) ケビン・ダナハー
(3) アラン・ゲイリー
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

英語圏における「フォークライフ（folklife）」と呼ばれる学問[1]は，地理学と類似した研究手法を有しているが，それが地理学とどのように関わるのかは判然としていない。この学問は物質文化研究を基軸とし，地域固有の家屋（vernacular houses），鋤に代表される農具などに留まらず，在来の車両，家具，衣服なども対象としている。このような対象も「フォークライフ」と呼ばれるので，学問もしくは方法としての「フォークライフ」を小稿では「フォークライフ研究」と呼び，対象とは明確に区別することをあらかじめお断りしておく。

フォークライフ研究の全容を提示することは筆者にはまだできないが，この学問における地理学出身者の業績をおもな手掛かりとして，フォークライフ研究の方法的特徴と対象を明らかにすることを本稿の目的とする。フィールドは，標題にあるようにアイルランドである。アイルランドはダブリンを首都とするアイルランド共和国と連合王国の一部をなす北アイルランドとに分かれている。本稿では両者の対抗・協力関係も視野に入れる事になる。

第一に，フォークライフ研究の方法に関して整理し，それが地理学とどのように関わるかを提示する。第二に，アイルランド共和国で実現にいたらなかった野外博物館構想を把握する。野外博物館とフォークライフ研究は，後述のようにともに北ヨーロッパを起源地としている。地域固有の家屋に関する研究蓄積は，実際に使用されてきた家屋・教会・店舗などの建築物を敷地内に移築してできあがる野外博物館には絶対的に必要とされるものである。したがって野外博物館の創出を糸口にして，フォークライフ研究における地域固有の家屋に関する研究水準を推し測ることが可能となる。また野外博物館がフォークライフ研究の拠点となる点も見逃すことのできない事実である。次に論じる北アイルランドでは，野外博物館が創出され，それを担ったのは，地域固有の家屋に関する研究蓄積のある地理学出身の研究者であった。彼らが野外博物館をどのようにして創設したかを第三に明らかにする。この脈絡で，アイルランド共

キーワード：アイルランド，フォークライフ研究，野外博物館，鋤，スペードミル

和国と北アイルランドの間における対抗関係を顕在化させることができると考えている。

第四に，フォークライフ研究において，地域固有の家屋とともに比較的蓄積の多い鋤（spade）に関する研究を整理する。その担い手は，北アイルランドにおけるエミール・エスティン・エヴァンス（Emyr Estyn Evans）［1905-1989］（以下，エヴァンス），アイルランド共和国のケビン・ダナハー（Kevin Danaher, アイルランド語表記ではCaoimhín Ó Danachair）［1913-2002］（以下，ダナハー），そして北アイルランドのアラン・ゲイリー（Alan Gailey）［1935-2013］（以下，ゲイリー）の３人である。この分野では，アイルランド共和国と北アイルランドの間における協力関係を捉えることになる。

なおアイルランドは，図１が示しているように32のカウンティ（county）からなり，アルスター（Ulster）・レンスター（Leinster）・コンノート（Connacht）およびマンスター（Munster）の４地方で構成されている。アルスターに含まれる９つのカウンティのうち6つが北アイルランドであり，他の26のカウンティがアイルランド共和国を構成している。

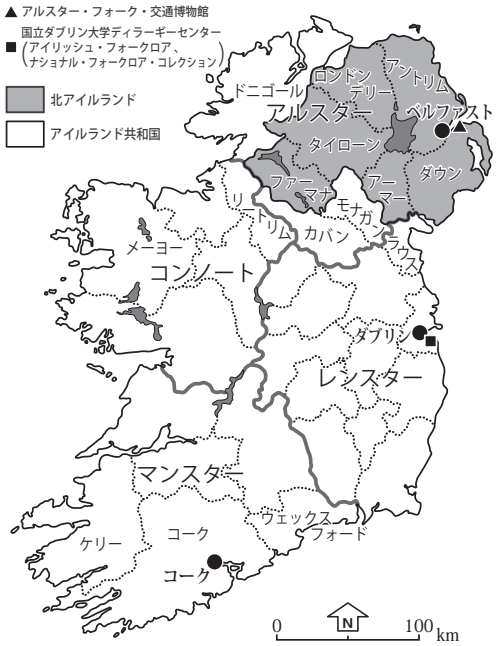


図１　本稿で言及する地名・機関の地理的位置

注１）地名のカタカナ表記はGoogle Mapsによる。
　２）カウンティに関しては，本文中ならびに図２・図６に記載されるものを示した。

Ⅱ．フォークライフ研究と地理学

連合王国では，“folklife” もしくは “folk life” を名称に含んでいる雑誌として *Ulster Folklife* 誌 と *Folk Life* 誌が刊行されている[2)]。前者はエヴァンスを中心とするthe Committee on Ulster Folklife and Tradition によって1955年に，後者は1961年に発足したthe Society for Folk Life Studiesによって1963年に創刊された。1968年に両誌はスウェーデン人のジギュルド・エリクソン（Sigurd Erixon）［1888-1968］（以下，エリクソン）の紙碑[3)] をそれぞれ掲載している。*Ulster Folklife* 誌は，エリクソンが1930年代にフォークライフ研究に関する国際的な研究交流の場となった *Folk-Liv* 誌をスウェーデンで創刊したこと，1967年にはまた別の学会誌の創刊にも貢献したことにも言及し，他方で *Folk Life* 誌は，彼がヨーロッパにおけるフォークライフ研究の優れた先駆者の１人であったと称えている。

エリクソン[4)] は，フォークライフ研究を基本的には人類学もしくは民族学の一分野と規定し，スウェーデンの場合であればそれを含むスカンディナビアの人々が研究の対象となる，と指摘した。つまり，対象地域が設定されて研究を進めていくので，フォークライフ研究は「地域民族学（regional ethnology）」に言い換えられる。一般的に民族学が「未開の諸民族（primitive peoples）」に力点を置きながら文化の進化を研究するのに対して，フォークライフ研究は “civilized peoples” の文化を対象とする，とエリクソンは述べている。ここでいう “civilized peoples” とは，文脈に即して言えばヨーロッパ人を意味してい

る。つまりフォークライフ研究は，地域民族学であり，同時にヨーロッパ民族学（European ethnology）とも言い換えられる。要するにヨーロッパ人が自らの文化を民族学の方法で捉えていくことが企図されていることになる。

エリクソンは，1951年に発表した論文[5]を，「我々が関係しているフォークライフ研究の課題は，これは私の意見であるが，地域的な基盤の上で，社会学的かつ歴史的な方向をもち，ある種の心理学的な側面をともなった比較文化研究である」という一文で結んでいる。これに先立って，同論文中で彼はフォークライフという言葉を使うことによって強調したいことは，「生活（life）」それ自体が主要な研究対象であることであり，その場合の“life”とは，社会のそれではなく個人（individual）のそれであると述べている。このような方法上の特徴に加えて，エリクソンは最も重要な研究手段の一つとして地図の作成を挙げている[6]。要するに，社会学・歴史学・心理学に加えて地理学的方法もフォークライフ研究には欠かせない方法だと見なされていたことになる。

フォークライフ研究と地理学との関係は，*Folk Life* 誌の創刊号で会長の序言に続く巻頭論文のテーマとされた[7]。その著者のロナルド・H・ブキャナン（Ronald H. Buchanan）はエヴァンスの弟子で，エヴァンスと同様にクイーンズ大学ベルファスト（Queen’s University, Belfast）（以下, QUB）の地理学教室に勤務する地理学者であり，エヴァンスらの活動にも加わり，the Committee on Ulster Folklife and Tradition の序列では第 4 位で，名誉編集者（honorary editor）の立場にあった。ブキャナンは，この論文のなかで，フォークライフ研究にとって補助的な学問である言語学・考古学・建築学・人類学などに比べると，フォークライフ研究よりも幅広いパースペクティブをもつ地理学は単に補助的な地位に留まるものではなく，特に視点と方法に関して地理学はフォークライフ研究に貢献できる，と主張した。文化地理学はフォークライフ研究にもっとも近接している，ともブキャナンは指摘している。

地図の重要性に関して，ブキャナンは地理学的研究では地図が基本的なツールであることを踏まえたうえで，地域的な基盤における諸現象の相互関係を追求するフォークライフの研究にもそれは有用であると述べている。彼によると，地図の三つの重要な機能は，①フィールドや図書館で集められたデータを記録して，特定の時期における分布を示すことができること，②分布をしめすことで，文化要素の空間的な関連性を示すことができること，そして③文化領域の地理的範囲を画することができることである。つまりエリクソンが指摘した地図の重要性に応えることができるのは地理学であり，地理学者であるということになる。このような貢献によって，地理学とフォークライフ研究との間には「強い紐帯（a strong bond）」ができあがる，とブキャナンは述べている。

地図のほかに，地域的な個性（regional personality）の研究に要される統合的な現象把握の方法には，地理学者の経験が強みになる。地理学者の文化景観に関する研究が，文化地域の認識のための追加的な基準を提供し，その一方でさまざまな環境条件下における文化の研究は，地域的個性の解釈には不可欠である，とブキャナンは指摘した。

ブキャナンによって表明された地理学とフォークライフ研究すなわち地域民族学との親密な関係は，エヴァンス，およびQUBの地理学教室で彼の薫陶を受けたジョージ・B・トンプソン（George B. Thompson）（以下，トンプソン）とゲイリーらの立ち位置を端的に示している。国立コーク大学（University College, Cork）（以下，UCC）のディアムド・オギョラン（Diarmuid Ó Giolláin）は，ア

イルランドにおけるフォークロアと民族学の研究史を論じたなかで，「北アイルランドでは，フォークロアとフォークライフの制度化は南よりも幾分遅れた。その先駆者は地理学者のエミール・エスティン・エヴァンス（1905-89）である」と書き，特にフォークライフ研究に関して，「（アルスター・フォーク博物館の）最初の館長であるジョージ・バートン・トンプソンと彼の継承者であるアラン・ゲイリーは，双方とも地理学者としての教育を受けている」と明快に指摘している[8)]。以上のことは，アイルランド共和国のフォークロリストは，エヴァンスらを地理学からフォークライフ研究に参入した人々だと認識していたことを示している[9)]。このような地理学出身の人々とは別に，ダブリンに位置する国立ダブリン大学（University College, Dublin）（以下，UCD）もフォークライフの研究者を擁していた。

1982年にダナハーに献呈された論文集の冒頭で，UCDのthe Department of Irish Folkloreのブー・アルムクリスト（Bo Almqvist）教授は，ダナハーのもっとも重要で長期にわたる貢献の一つが，学部生向けに“folk-life studies”のコースを創設したことである，と述べている[10)]。この評価をもとにすると，UCDではダナハー を中心に物質文化に関する研究が進められてきたことがわかる。彼の膨大な研究業績のなかで家屋に関するものが顕著であることをみても，彼をフォークライフの研究者であるとみなすことができる。しかも，彼の方法上の特色は地図を駆使したことであった[11)]。

以上のような方法的特徴をもつフォークライフ研究の対象となる物質文化のなかで，中心をなすのはそれぞれの地域固有の家屋であった。そしてそれに次ぐのは，農耕や泥炭の採取に用いられた鋤である。

文化景観の構成要素となる家屋と同様に，鋤が地理学出身者を含むフォークライフ研究者の関心を集めたことには若干の違和感を禁じ得ない。日本では家屋に関して，地理学者の膨大な研究蓄積があるものの，主要な農具である鍬に関してその地域差が論じられることは管見の限りではほとんどなかったからである。しかし，ダブリンの国立博物館は1960年代までに各地の鋤を収集していることからも明らかなように，鋤に関する関心は高かったようである[12)]。

次章では，地域固有の家屋に関する研究蓄積が野外博物館の創設には不可欠である，との前提に立ち，アイルランド共和国におけるその構想に関して検討する。

Ⅲ．アイルランド共和国におけるフォークロア研究と野外博物館の構想

グリム兄弟が19世紀に採集した昔話が，学問としてのフォークロアの基礎をなしたといわれている[13)]。そして「フォークロア」という言葉が作られたのは19世紀の半ばのことであった[14)]。この語は口述もしくは歌として伝えられてきた物語，神話，格言などで表現された人々の伝承，習慣，信仰などを本来的には意味した。その後さらに人々の社会的な伝承全体を含むようになったといわれている。1960年代以降には，フォークロア研究は自らの位置の再確認を行なうこととなった。その理由のひとつとして伝統的な農村生活が消滅していったことがある。その結果，フォークロリストは社会科学とくに人類学との関わりを増大させていくこととなる。そして現在では，口承文芸のほかに物質文化・慣習・信仰・民俗音楽・ダンス・芝居などもフォークロアに含められることもあるほど，研究の対象は広げられてきている。

アイルランド共和国では，フォークロア研究は単なる学術研究以上の重みを有してきた。同国の成立過程をみると，1921年に「アイルランド自由国」となり，1937年には国名をエールとした。このような状況のなかで，

フォークロア調査がジェームス・ハミルトン・ディラーギー（James Hamilton Delargy, アイルランド語ではSéamus Ó Duilearga）［1899-1980］，以下，ディラーギー）を中心に進められた[15]。1927年に発足したthe Folklore of Ireland Societyがフォークロアに関する学術誌を創刊し，1930年には政府の補助のもとにthe Irish Folklore Instituteがディラーギーを長として組織され，1935年には政府によってthe Irish Folklore Commission（以下，IFC）が設立された。当時の政治的指導者であったイーモン・デ・ヴァレラ（Éamon de Valera）が，フォークロア調査を積極的に支援したと言われている。文化的な独自性を国民に知らしめ，国家として自立することが企図され，独立間もないこの国のアイデンティティの確立が急がれたのであった[16]。

IFCによるフォークロアの調査は三つの部分から構成されている[17]。第一に，IFCが雇用した調査者（collector）による聞き取り調査があり，そのデータは“main collection”と呼ばれている[18]。第二は，小学校の教師が指導した，児童による祖父母などからの聞き取り調査であり，そのデータは“schools collection”と呼ばれている。そして第三はquestionnaireつまりアンケートである。IFCによるアンケートは，1938～1945年まで連続して実施され，テーマとして「収穫時の祭り」，「子供の遊び」，「クリスマスの習慣」，「伝統のなかの鍛冶」などがあった[19]。なお，IFCは，アイルランド政府の教育省から1971年にUCDに移管され[20]，上記のデータは，National Folklore Collectionとして収蔵されている。

IFCによるフォークロアの調査とは別にアイルランド共和国で企図されたのは，野外博物館を創設することであった。室内に標本が展示される通常の博物館とは異なり，野外博物館は移築された複数の建物で構成される。世界初の野外博物館は，1891年にアルトゥール・ハゼリウス（Artur Hazelius）によってストックホルムで創設されたスカンセン（Skansen）である。このような博物館[21]の創設は，国家の範域に位置する多様な建物，特に家屋を展示することで，国民を教化し，国家としてのまとまりをもたせようとする意図によるものであった[22]。

北欧に留学したディラーギー は，1929年11月の記録に，ダブリン近郊に野外博物館を創設する構想を書きとどめている[23]。ディラーギー が，野外博物館のモデルとしたのはスカンセンであった。彼自身は，フォークロアの調査とアーカイブの創設，ならびにフォークロアの学術誌の編集に精励していたので，野外博物館を創設する運動の中心にはいなかったようである。1930年代以降に，この運動が同国でどのように進展していたかに関して，筆者はまだ十分な知見を得ていない。しかし，次節でみるように，1950年代における北アイルランドでの野外博物館創設の動きを勘案すると，具体的な計画はアイルランド共和国にはこの頃にあったと推測される。

アイルランド国立博物館のアンソニー・T・ルーカス（Anthony T.Lucas）は，1967年に発表した論文[24]のなかで，「国立のフォーク博物館はまだこの国にはないが，政府はこの目的に利用できる場所を入手した。そこには17世紀の立派な建物があり，それは本来的に年老いた兵士たちのための病院であった。その建物は，フォークライフの資料コレクションを保存し，かつ体系的に展示することになる。その一方で，その敷地は再建された家屋や他の野外展示を見せる場所として使われる」と述べている。この叙述によれば，ルーカスの言うフォーク博物館は屋内展示施設と野外博物館の双方をそなえたものであった。筆者によるUCDとアイルランド国立博物館への照会によると，その建物とは，かつての「キルメイナム王立病院（the Royal Hospital, Kilmainham）」であった。

2015年２月に筆者が行なった現地調査によ

ると，その建物の西隣に緑地がひろがっており，そこに野外博物館が構想されたものと思われる。しかし，その建物が，現在ではアイルランド近代美術館として利用されていることから明らかなように，この計画は実現されなかった。その理由に関して，UCDのパトリシア・ライサット（Patricia Lysaght）は政府の財政支援が無かったことを1993年に指摘している[25]。

なお，アイルランド共和国における国立の博物館のひとつとして，2001年に“The Museum of Country Life”がカウンティ・メイヨーに建てられ，2002年に筆者はそこを訪れたことがある。同博物館は，屋内展示施設のフォーク博物館であり，今日に至るまでアイルランド共和国では国立の野外博物館は創設されていない。

Ⅳ．北アイルランドにおける野外博物館の創設

北アイルランドでは，QUBの地理学教授であったエヴァンスとその周辺の人々が，野外博物館を実現させた。ウェールズ人のエヴァンスは1928年にQUBに採用されている。彼はアイルランドの大学で最初に任用された地理学者であり，考古学・民族学などの調査研究もおこなっていた[26]。1942年に刊行された*Irish Heritage*によって，エヴァンスが北アイルランドで高い評価を得ていたことは，その後の彼の動きを把握する上で重要である。すでに述べたように，彼が組織したthe Committee on Ulster Folklife and Traditionは，1955年に*Ulster Folklife*誌を刊行した。

この委員会組織は，北アイルランド政府からの助成金を得ていた。1957年12月5日，午後3時からベルファストの中心部にあるBryson Houseというビルで開催されたthe Committee on Ulster Folklife and Traditionの会議の議事録を，筆者は2008年にUFTMの図書室で閲覧した。それには北アイルランド政府の財務大臣テレンス・オニール（Terence O’Neill）からの手紙の抜粋があり，過去4年間にわたって政府が助成したこと，この委員会が「広範な一般の支持（wide public support）」を得ていないのであれば援助が難しいことなどに言及したあとに，1958・59年に200ポンドが与えられることなどが書かれている。それに対して，金額の少なさに委員一同が失望したと明記されている。この議事録をもとに，エヴァンスに率いられた同委員会は1954年ころから北アイルランド政府の助成を得ていたことが明らかとなり，それに加えて，この委員会の活動に関して北アイルランド政府との間に多少の距離があったこともうかがい知ることができる。

エヴァンスらは北アイルランド政府との関係をもとにして，野外博物館の創設を積極的に働きかけた結果，同政府はアルスター・フォーク博物館（the Ulster Folk Museum）（以下，UFM）を創設することを1958年に決定した。アイルランド全体が領土であると主張するアイルランド共和国が先に野外博物館を造れば，当然のことながらアルスターの家屋を展示することが予想された。それは北アイルランドにとって決して喜ばしいことではないはずである。このことを連合王国への帰属意識を強く持つユニオスト（Unionist）に理解させて，博物館創設の支持を集めたようである[27]。

わずかに一棟の農家が移築されただけであったが，アイルランド初の野外博物館UFMは1963年5月に一般に公開された[28]。その後，エヴァンスと弟子たちは，UFMを拠点として調査・研究活動を展開した。UFMは1976年に交通博物館（Transport Museum）と統合されて，アルスター・フォーク・交通博物館（Ulster Folk & Transport Museum）（以下，UFTM）となり，現在にいたっている[29]。

エヴァンスらは，北アイルランドよりも広いアルスターという地方の地域性を把握することを重要視し，図1に示した，アイルラン

ド共和国に属するカウンティ・ドニゴールでの調査も1961年に行なっている。北アイルランドでは直接的なフィールドワークのほかに，小学校の教師が生徒を指導して，それぞれの祖父母から聞き取り調査をすることが小規模ながら実施されている。調査協力者へのアンケートも1961～1989年までおこなわれた。そのテーマは「伝統的家屋」，「年中行事」，「葬送儀礼」，「鍛冶」など多様である。このように，彼らの方法はIFCの方法を真似たものであったと見てよい。1960年代におけるIFCとUFMとの関係を，われわれは次の事実をもとに推し量ることができる。

1961年にUFMがIFCに対して，IFCがアルスターで収集したデータのマイクロフィルムの提供を求めた際に，IFCは拒絶している[30]。しかし，このことをもとにしてIFCとUFMとを単に対立的なものとみなすことには注意が必要である。というのはIFCの主要なメンバーの一人であったダナハーのように，UFMとの親密な協力関係を維持した研究者がいたことが，その第一の理由である。さらに，UFMならびにUFTMのアンケートは，Linda-May Ballardによると都合59回行なわれているが，1983年と1989年には，かつてのIFCがUCDに移管されてできたthe Department of Irish Folkloreがそれに協力していることが，その第二の理由である[31]。

1958年にUFMの創設が北アイルランド政府によって決定されて後も，エヴァンスが主導的な役割を果たしたことはいうまでもない[32]。彼のもとで具体的な実務にあたったのは，トンプソンとゲイリーであった。1959年１月までにトンプソンの館長就任は決定しており，同年４月１日に正式に着任し，1986年10月に退職するまで館長を勤めた。

1960年には館員は６人であったが，翌年にはトンプソンの後輩にあたるゲイリーが新設の調査責任者（research officer）として着任した。彼は，後にトンプソンから館長職を引き継ぎ，1996年に退職した。UFMの年報には，ゲイリーは1957年にQUBの地理学教室を首席で卒業し，グラスゴー大学地理学教室の助手となったことが記載され，「ゲイリーの関心は人文地理学におかれている。このことは卒業後にグラスゴー大学でおこなった，スコットランド高地の南西部での集落形態と家屋型に重点をおいた詳細な研究に示されている」と書かれている[33]。野外博物館への家屋の移築を進めていくために，家屋に関する研究蓄積があるゲイリーをエヴァンスが抜擢したのであった[34]。

エヴァンスらは，UFMの第一義的な機能はアルスターにおけるフォークライフの研究・保存・記録であるとの認識に立ち，北アイルランド各地から建築物を移築した[35]。以上のように，野外博物館はアイルランド共和国と北アイルランドの双方で構想されたが，実現できたのは北アイルランドだけであった。おそらく地域固有の家屋に関する研究蓄積に関しても，両者の間には違いがあったものと思われる。それでは，フォークライフ研究のもうひとつの主要分野である鋤に関する研究はどのように進められたのであろうか。

Ⅴ．鋤に関する研究史

(1) エミール・エスティン・エヴァンス

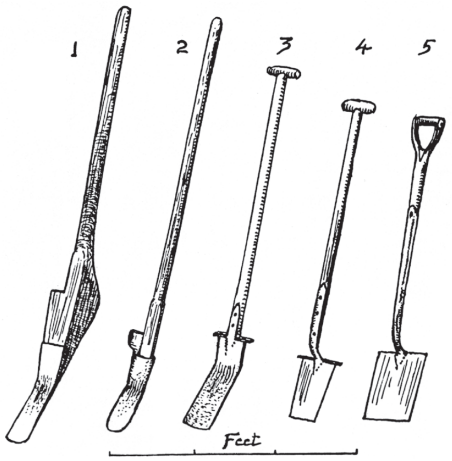
1942年にエヴァンスは*Irish Heritage*を刊行した。一般向けに書かれたこの書物で，エヴァンスの研究は広く社会に知られるようになった，といわれている[36]。“The Real Ireland”，“The Landscapes; The Beginnings”など18の章からなるこの書物のなかで，「鋤(Spades)」という章が設けられている。このことは，アイルランドの伝統を論じる際に，「アイルランドの道具のなかでもっとも特徴的な」[37] 鋤は欠かせない，との判断に基づいているに違いない。

鋤は人力で畝を作るために不可欠の農具である[38]。アイルランドの主要作物であるジャ

ガイモの栽培で，種芋を植える際にも鋤が用いられた[39]。エヴァンスはアイルランドの鋤を二つに大別した。一方が片耳型（one-eared type）で，他方が両耳型（two-eared type）である。片耳型はアイルランド西部や南部の海岸地域で用いられるものの，北アイルランドではほとんど知られておらず，そこでは両耳型が一般的である。アルスターやレンスターに両耳型が普及したのは20世紀の前半になってからのことで，それはイングランド人からの影響による，とエヴァンスは説明している。

地域によって両耳型の大きさはさまざまであることが分かっているが，それは地図で示されてはいない，とエヴァンスは指摘している。両耳型の鋤は主に工場で製造され，そこでは水車によって駆動するチルトハンマーが用いられた。つまりこの工場がspade millすなわち「水車を用いて鋤をつくる工場」であり，本稿では片仮名で「スペードミル」と表記する。そこでは，作業全体を統括する者が鋤製造者（spade maker）で，その統括のもとで炉を管理するfurnace man，鍛造を担うhammer man，そして最終の仕上げを担当するfinishing smithなどによる分業体制がとられていた。エヴァンスはそのようなスペードミルが旧来の鍛冶にとってかわったと述べている。なお，エヴァンスは自身がカウンティ・アントリムに位置するスペードミルを訪ねたことに言及し，そこでは4世代にわたって鋤が製造されてきたこと，その経験は鍛冶よりも進んだものである，と述べている。

1957年に刊行された*Irish Folk Ways*[40]は，*Irish Heritage*の増補改訂版と見なしてよいだろう。「犂と鋤」（“Plough and Spade”）という章にある図2は，耕作ならびに湿地での泥炭の採取などに用いられる鋤に関して，エヴァンス自身が描いたものである。エヴァンスの著書や論文には，彼自身による多くの挿画が含まれている[41]。この図は鋤の形状をより詳細に描き，縮尺を明示して大きさの相違も表現している。左端の1が広義には片耳型に含まれるロイ（loy）で，2が片耳型，3が両耳型，4と5も鋤で，エヴァンスは1から徐々にスペードが進化してきたと捉えている。片耳型を使用する場合には，右足を鋤の肩に置くことになる。エヴァンスによると，アイルランドの特に西部では土を掘り起こす場合にはそのようにする人々が多かったが，北東部すなわちプロテスタントが多数を占める地域では通常は左足を両耳型の鋤の肩に置いた。鋤の形状に見られる地域差だけにとどまらず，作業姿勢の相違に言及しているのは，フォークライフ研究ならではのことかもしれない。



（1）ロイ（リートリム）（2）片耳型の鋤（ケリー）（3）両耳型の鋤（ファーマナ）
（4）庭園用の鋤（ウェックスフォード）（5）イングリッシュの鋤

図2　鋤の進化

出典：E. Estyn Evans, *Irish Folk Ways*, Routledge & Kegan Paul, 1957, p.128.

片耳型の鋤は，両耳型の普及で次第に姿を消しつつある，とエヴァンスは述べている。アイルランドの多くの地域で，両耳型が片耳型を次第に駆逐したのは20世紀になってからのことである。片耳型が姿を消していくことが「進化」であるとする発想は，アイルランドには北東部のように進んだ地域と西部のような遅れた地域があるとの認識にもとづくも

のと解される。

エヴァンスは，*Irish Folk Ways*では，カウンティ・タイローンのスペードミルに残された鋤の寸法記録をもとにすると，その大きさと形はアルスターでも地域によって異なる，と述べている。

1942年の*Irish Heritage*では，鋤の大きさが地域によってさまざまであることが分かっていてもそれは地図化されていないとエヴァンスは指摘したが，1957年の*Irish Folk Ways*中の図３では，21本の鋤に関してそれぞれの形状が地域によって異なることが示されている。柄の部分に関しても，地域によって異なることが表現された。この図をみると，アルスターとレンスターには両耳型が顕著である一方，コンノートとマンスターには片耳型が分布していることがわかる。とはいえ，描かれた鋤のどの部分が具体的な地理的位置を示すものかが判然とはしておらず，分布図としてはいささか不十分であると言わざるを得ない。*Irish Folk Ways*はおもに一般の読者を対象としているので，さほどの厳密さが要求されなかったものと思われる。エヴァンスがこの図に縮尺を付していないのも，同じ理由によるのであろう。

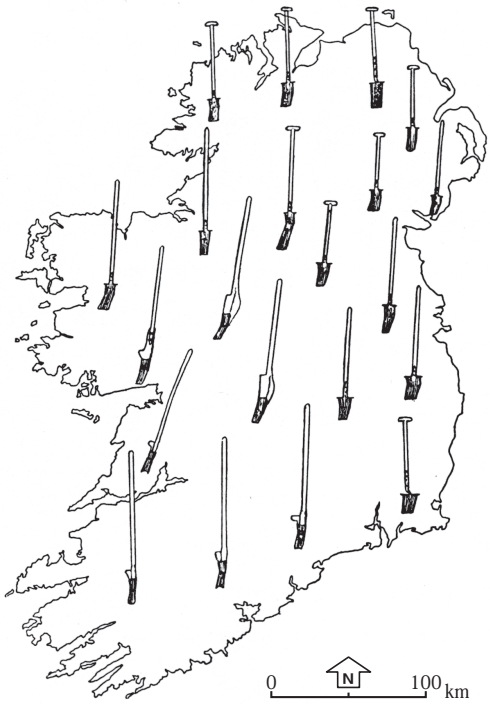


図３　鋤のタイプ

出典：図２と同じ。(p.136)
注：原図には，縮尺・方位は記載されていない。

(2) ケビン・ダナハー

エヴァンスが*Irish Folk Ways*を刊行した1957年に，ダブリンではダナハー が「アイルランドのフォークライフにおけるいくつかの分布パターン (Some Distribution Patterns in Irish Folk Life)」を発表した。そのなかで彼は，家屋内で家畜と共に暮らすこと，屋根の葺き方，鋤の型などに関して７葉の縮尺のない地図を描いている[42]。つまり彼は，IFCが収集したデータをもとに，「地域的な多様性 (regional variation)」を示すために地図が適していると判断していたのであった。

鋤に関して，「現在では主として小さな庭で使用されるけれども，より古い時代において鋤はアイルランドにおける最も重要な農具であった」と明言し，「土壌の条件は地方で異なり，地域の必要に適した道具を生産する鍛冶の技能によって，非常に多様な鋤が産み出された」とダナハーは述べている。鋤の形はさまざまで100をはるかに越える種類が存在し，「時は流れ，鋤の製造はスペードミルによってとってかわられた」と指摘した。スペードミルが製造するようになっても画一的な鋤が供給されたということではなく，それぞれの地域に適したものが造られたのであった。

図４には，IFCのアンケート[43] によって得られたデータとアイルランド全土における130の鋤をもとにして，300を越える地点の情報が示されている，とダナハーは述べている。しかしながら，この図にはそれらの地点

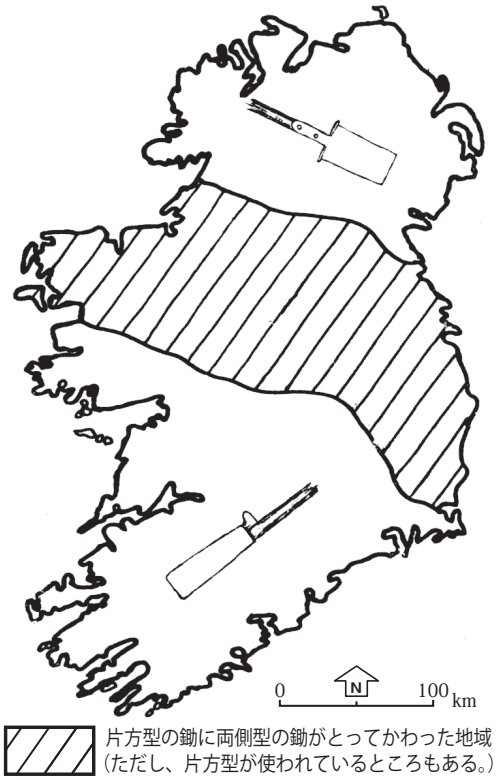


図 4　アイルランドにおける鋤の 2 つのタイプ

出典：Kevin Danaher, “Some Distribution Patterns in Irish Folk Life”, Béaloideas, 25, 1957, p.117.
注：原図には，縮尺・方位は記載されていない。

がプロットされているわけではなく，すでに地域区分がなされた結果が示されているだけである。縮尺が用いられていない図で，全土が三つに区分され，北東部では両側型の鋤（two-sided spade）が，南西部では片方型の鋤（one-sided spade）が図示されている。前者はエヴァンスがいう両耳型であり，後者が片耳型である[44]。代表的な鋤の形が描かれてはいるが，柄に関しては斟酌されておらず，それぞれの地域における多様性に関しては捨象されている。

レンスターの海岸部からコンノートの北部にかけて斜線が施された地域では，人々の記憶によると，以前にはこの地域で片方型の鋤が使用されていたが，両側型の鋤がそれにとってかわった。この地域では片方型がまったく姿を消したところもあるし，いまだに使われているところもある，とダナハーは書いている。ダナハーが300を越える地点に関する情報を提示していれば，斜線が施された根拠に関してわれわれ読者は彼と認識を共有できたはずである。

1963年に，彼は「アイルランドにおける鋤（The Spade in Ireland）」を発表した。図 4 と同じ地図がそれには掲載されていることをみても，この論文は1957年のものの続編をなすものと思われる。これには 7 種類の鋤が図示されているが，縮尺は用いられていない。ダナハーは，犂と鋤を比較して，前者は社会的地位の高さのシンボルであるのに対して，後者は低い地位のそれであると指摘した[45]。つまり鋤は，アイルランド全土における小土地保有者や農業労働者が使用する農具であった。

「鋤は，鍛冶によって製造された。冬は農作業もほとんど停止するので，鍛冶にとって比較的暇な時季であった。そのような時季に鍛冶は春に向けて鋤を生産した。（中略）鍛冶場では 2 人の男が大槌をつかい，残る一人がハンマーを使用した」[46] とダナハーは述べている。18・19世紀に，小さなスペードミルが，次第に鍛冶にかわって鋤を製造するようになった。両側型の鋤が片方型の鋤に取って代わる地域では，小規模なスペードミルは，もともとそこで使用されていた片方型の鋤にサイズ・形・重さなどの点で適した両側型の鋤を製造する必要性を理解した。しかし製造工程についてみると，両側型の鋤のほうが片方型の鋤のそれよりも複雑であった。例えば，鋲締めは片方型の鋤には必要なかった。スペードミルであればこのような工程にも対応可能であったが，鍛冶は両側型の鋤を製造する技術的な伝統をほとんど有していなかった。以上のようなダナハーの説明を踏まえると，結局のところ水力によって駆動されるチ

ルトハンマーを有さない鍛冶は，鋤製造から脱落していったことになる。

スペードミル相互でも，競合が見られた。小規模なものは大規模なものに駆逐された結果，それぞれの地域から生まれ出た多様な鋤が生産される状況から，標準的なタイプのものが製造・供給されるようになったのである[47]。

(3) アラン・ゲイリー

ゲイリーは，アイルランドにおけるエヴァンスとダナハーによる鋤の研究史を次のように叙述している[48]。「片方型の鋤と両側型の鋤の形態上ならびに分布的特徴に関しては，エヴァンスとダナハーによって先鞭がつけられた。この二人は，アイルランドの鋤を包括的に捉えたのであった。それぞれが異なる地図表現を用いて，二つのタイプの鋤が使用されている地域を示した。エヴァンスの議論は，アイルランドの民族学に関わる総体的な研究業績の必要に必然的に合わせたものであったが，ダナハーは主として片方型の鋤を取り扱い，両側型の鋤に関する言及は限られていた。それは，ダナハーが執筆した当時には得られるデータの範囲が限られていたからである」[49]。

エヴァンスとダナハーの研究成果をこのようにまとめたうえで，ゲイリーはアイルランドにおける鋤にみられる地域的多様性と，片方型の鋤と両側型の鋤の関係についてその詳細を明らかにしようとした。そのために彼はダブリンにあるアイルランド国立博物館が収集した鋤とその関連文書，ならびにIFCの収集資料も活用している。つまりゲイリーの図は北アイルランドとアイルランド共和国との協力関係のもとに作成されたとみなされる。さらに指摘すべき点として，ゲイリーは，エヴァンスのいう「片耳型」と「両耳型」という術語ではなく，ダナハーの「片方型」と「両側型」を使用していることも同様の関係に基づくとみなしてよいだろう。

ゲイリーは，スペードミルが所蔵する文書も使用した。さらに片方型の鋤に関しては180以上の実測された標本が用いられ，両側型の鋤については250地点に関する情報を彼は入手している。このような豊富なデータをもとにして描かれたのが図5である。(a) 図の1は，図2の3にあるようにシャフトの上部にハンドルがあり，全体としてT字状の柄となっているものである。それが，アルスターの大部分とレンスターの北部に分布している。2は，図2の2のように，木部はシャフトだけのものである。(a) 図をみると，それはコンノートとレンスターに分布していることが確認され，「1.シャフトの上部にハンドルがあるもの」と「2.木部がシャフトだけのもの」がそれぞれ分布する地域の間には，双方の型が混在する漸移帯が位置している。シャフトにみられる地域差は，エヴァンスによる図3にも描かれているが，ゲイリーはより精細に地図化した。

(b) 図では，4の線が片方型の鋤の北限を示し，5の線が両側型の鋤の南限を表している。そして6の斜線が付された地域が両方の鋤が使用されている漸移帯である。なお，両側型の鋤の地域では，「屈曲しているもの (hooked)」と「ゆるやかに曲がっているもの (curved)」の区別も示されている[50]。(b) 図の主題は，ダナハーによる図4のそれと同じであるが，地図表現は格段に進んでいるといえよう。

(d) 図は，片方型の鋤に関して，刃部 (blade) の縦の長さを横幅で割った値をもとにした等値線図である。この値が大きいほど，より細長いことを意味している。以上のようにゲイリーによる研究の深化は，分布図と等値線図を駆使する地理学的方法によって図られたとみなすことがゆるされよう。

二つの型の鋤が存在していることにかかわって，ゲイリーもその製造者の相違について言及している。熔接を要する両側型が製造されるスペードミルは，アイルランド北部に

(a) アイルランドの鋤に見られるシャフトのタイプ
(b) アイルランドにおける鋤の型式別分布
(d) 片方型の鋤の刃部に関して、縦の長さを横幅で割った値の等値線

図 5　Alan Gaileyによるアイルランドにおける鋤の地理的分析

出典：Alan Gailey, "The Typology of the Irish Spade", in Alan Gailey and Alexander Fenton eds., *The Spade in Northern and Atlantic Europe*, Ulster Folk Museum and Institute of Irish studies, Queen's University, Belfast, 1970, p.36.

注 1）叙述の都合上，図(c)は除く。
2）この図の日本語タイトルは筆者による。

多く分布している。他方で，それを要しない片方型の鋤は，鍛冶によって製造された。

ゲイリーによると，アイルランドにおける鋤の製造が専門化して出現したのは，18世紀の第４四半期であった。18世紀の後半以降におけるアイルランドの人口増加は，鋤の需要増をもたらしたが，従前より農具の製造を行ってきた鍛冶はそれに対応できず，1780年ころに登場したスペードミルが鋤の製造の主力を担うようになった。このような傾向は，アイルランドの北部で顕著であった[51]。

鋤に関する研究は，エヴァンスとダナハーそしてゲイリーへと引き継がれたが，それは図表現で言えば分布図自体が精緻化したことと同義である。エリクソンが指摘したフォークライフ研究における地図の重要性は，この３人の研究成果によってより明確になる。また，エヴァンスとゲイリーに限定すれば，ブキャナンが指摘した地理学とフォークライフ研究との「強い紐帯」を我々は看て取ることができる。

ゲイリーによる研究は，分布図で議論を行なうレベルよりもさらに掘り下げられたものになっている[52]。その方法的特徴として４つの点がある。第一に，鋤を製造したスペードミルに関して，彼が考察を加えていることが指摘される。鍛冶とスペードミルとの相違点に関してゲイリーは「ヨーロッパの国々にはアイルランドのスペードミルと同様の設備を使っていたところもあるが，アイルランドの多くの地域，特に南部と西部では鍛冶はいかなる水力設備も用いないで鋤を製造することが20世紀に入るまで続けられた」[53] と述べたあとで，18世紀後半から1960年までの間にアイルランド全土で操業した67箇所のスペードミルの分布を図６で示した。そのうちの１～

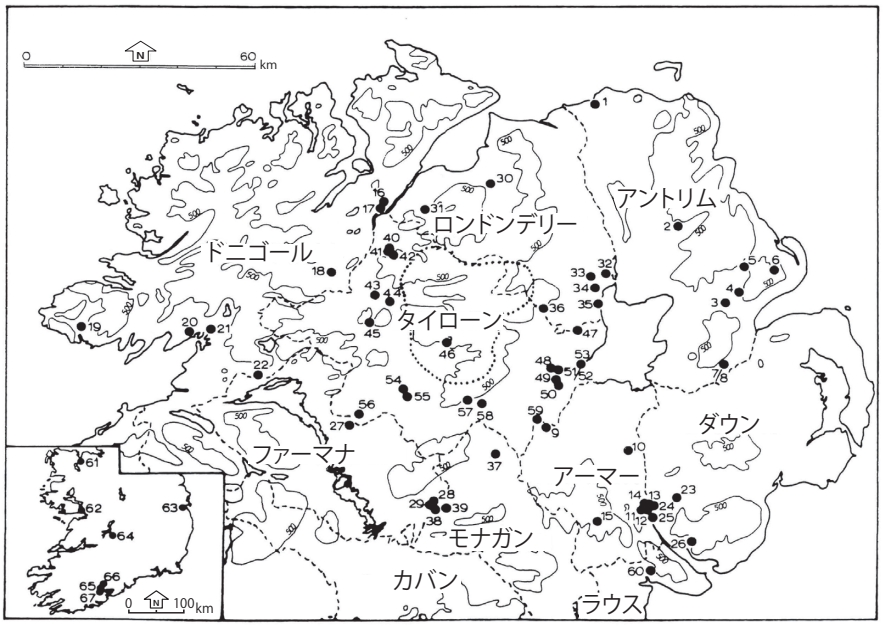


図６　アイルランドにおけるスペードミル（水車を用いて鋤をつくる工場）の分布（18世紀後半～1960年）

出典：Alan Gailey, *Spade Making in Ireland*, Ulster Folk & Transport Museum, 1982, p.50.

注１）上の図では，アイルランドの北東部が大きく描かれており，左下隅の図は，それ以外の地域を示している。

２）図７・８・９のドラムナキリーは，図中の46である。

３）46の周辺に記される破線は，図９にも表現されている。

59はアルスターに位置していたのであった。

一方，アイルランド共和国ではダブリンやコークなどの近郊に，それらの分布は限定されていた。67箇所のスペードミルの存続期間についてみると，20世紀の後半頃まで生き残ったのはわずかに7箇所にすぎない。その一つである，カウンティ・タイローンのドラムナキリー（Drumnakilly）に位置したダリー（Daly）家が家業として経営していたスペードミルに関して，ゲイリーは聞き取りによってその3世代の家系図を示している。つまり，スペードミルの分布にとどまらず，それを経営した人間を家族単位で捉えている点は，民族学的だと見做せるかもしれない。これが，第二の点である。

図7をみると，最も若い世代のうちで生年が明らかなものはMichael，John，Peterであり，彼らは1880年代と90年代[54]に生まれている。したがってこの3兄弟の父Peterと祖父Michaelは19世紀に生まれたものとみなされよう。ゲイリーによると，ダリー家は1833年をさほど遡らないころにスペードミルの製造を創業した。つまり図7は，19世紀以降において鋤の製造を行った一族の家系図にほかならない。創業世代のFelixとMichaelはそれぞれが住居と所有地をもち，それらを合計すると48エーカーになった。

ダリー家のスペードミルを構成した建物に関して，ゲイリーは聞き取りと実地調査をもとに図8を作成した。川の右岸にそれらは立地し，水車が流れのなかに置かれていた。水車の動きはカムをもつ車に伝えられ，カムがビームを持ち上げ，その先にあるチルトハンマーが持ち上げられて後に，金床の上に置かれた鉄に打撃が加えられる。もちろん，その前に鉄は図中で“H”と記された炉（hearth）で熱せられる。水車とチルトハンマーは鍛冶の鍛冶場には存在しないが，炉そのものは鍛冶のものとほとんど同じである。その西側の建物にも炉があることから判断して，ここで

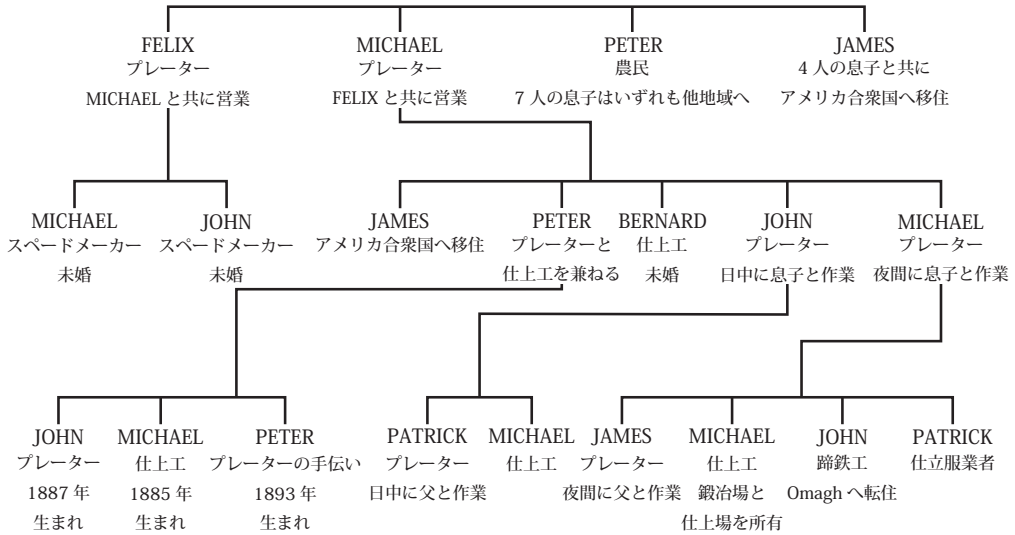


図7　カウンティ・タイローン のドラムナキリーにおけるダリー家の3世代

出典：Alan Gailey, “A Family Spade-making Business in County Tyrone”, Folk Life, vol.10, 1972, p.31.
注1）この図には，女性は示されていない。
2）プレーターは，エヴァンスのいうfurnace manとhammer manの双方の役割を担う者のように解されるが，断定は留保する。

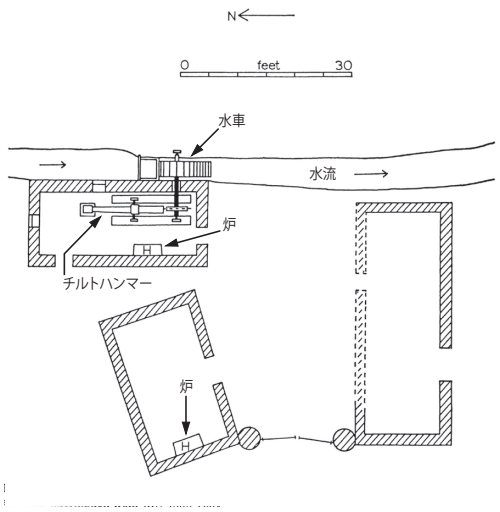


図8　ドラムナキリーにおけるスペードミルの見取り図

出典：図7と同じ（p.33）

仕上げ工程が行なわれたと解される。ここは鍛冶の鍛冶場とほとんど同じである。鞴に関しても水力によるものが使用されていたようであるが，詳細はわからない。水力の利用とチルトハンマーの有無が，スペードミルと鍛冶とを区別するものであった。図8と図6とを比較すると，当然ながら図8の縮尺は図6のそれよりも大きい。地表上の諸事象を論じる際に，主題に適した縮尺が選択されるのは，地理学的な方法である。これが第三の点である。

ダリー家による鋤の商圏に関してもゲイリーは明らかにしている。図9のほぼ中央に位置する黒い点はダリー家が位置するドラムナキリーを示し，小さな黒い点が他のスペードミルを表している。太い破線で囲われた

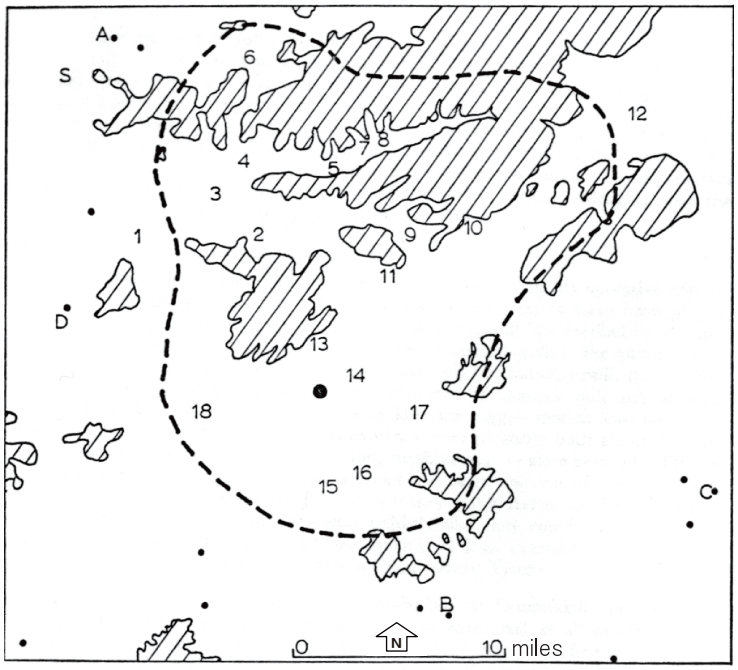


図9　ドラムナキリーにおけるスペードミルの位置と商圏

出典：図7と同じ。（p.28）

注1）大きな黒い点は、ドラムナキリーのスペードミルの位置を示している。

2）小さな黒い点とA～Dは、他のスペードミルを示している。なお，Sに関しては判然としない。

3）破線は、ドラムナキリーのスペードミルの商圏を表している。

4）1～18の数字は、ドラムナキリーのスペードミルの鋤が販売されている場所を表している。

5）斜線部は山地もしくは林野を示している。

「商圏（market area）」をみると，他のスペードミルと競合しつつそれが形成されたことが推測される。ダリ―家が商圏の中心に位置していないのは，18のオーマ（Omagh）に位置する卸売業者から鉄と石炭を運ぶ輸送費をできるだけ少なくするためであった。図９をもとにすると，ゲイリーは機能地域の概念をスペードミルの研究に導入していることが明らかである。これが，ゲイリーによる方法の第四の特徴である。なお，斜線で示される山地もしくは林野が位置しているので，商圏は不整形であるとはいえ，ダリ―家は自らの周辺地域に鋤を供給する近在必要工業的な性格を有していたと解される。

Ⅵ．おわりに

本稿の目的は，アイルランドにおけるフォークライフ研究の方法的特徴と対象を明らかにすることであった。アイルランド共和国と北アイルランドとの対抗・協力関係を視野に入れて，おもに地理学出身者の業績を考察の手掛かりとした。Ⅰでは，フォークライフ研究の方法に関して整理し，それが地理学とどのように関わるかを提示した。スウェーデンのエリクソンが唱導したフォークライフ研究では，研究手段として地図の作成の重要性が指摘され，エヴァンスの弟子であるブキャナンは地理学とフォークライフ研究の間の「強い紐帯」にまで言及した。なぜ，北アイルランドでは地理学者がフォークライフ研究に積極的に関わろうとしたのであろうか。アイルランドを考察の地域的枠組みとする本稿の射程には含まれないものの，サウアーに代表されるアメリカ文化地理学とエヴァンスとの関係，エヴァンスが出身のウェールズで指導を受けたハーバート・ジョン・フルール（Herbert John Fleure）［1877-1969］の地理学思想，フォークライフ研究を北アイルランドよりも早く受容したウェールズでの動向などを含めて考える必要がある。

Ⅱでは，実現にいたらなかった，アイルランド共和国の野外博物館構想に関して論じた。野外博物館のはじまりは，スウェーデンでのことであった。それは他のヨーロッパ諸国にも影響を与えたことはよく知られた事実である。スウェーデンにおけるフォークライフ研究と野外博物館との関係について，筆者の考察は及んでいないが，各地から地域固有の家屋を移築するに際して，フォークライフ研究における当該分野の研究蓄積が必要とされることは自明のことと思われる。その点を本稿では前提として，アイルランドにおける野外博物館を論じた次第である。アイルランド共和国におけるその分野の研究史を整理することも今後の課題となるにちがいない。

Ⅲでは北アイルランドにおける野外博物館に関して論じた。エヴァンスとその弟子たちは北アイルランド政府を動かして，構想を実現させることができた。ユニオニストに働きかけたことから明らかなように，彼らは実に巧妙に運動したことは事実である。そうして創出された野外博物館が，その後のフォークライフ研究を促進させるための拠点となった。

ⅡとⅢとを比較すると，地域固有の家屋に関する研究蓄積の点では，北アイルランドのほうが大きかったように推定される。それを裏付けるためにも，アイルランド全体における地域固有の家屋に関する研究の体系的な整理が必要とされる。もとより政府の財政援助の存否は，野外博物館の実現にかかわる決定要因であることはいうまでもない。しかし，それに加えて，北アイルランドでは運動の担い手が地理学出身者であったこと，他方のアイルランド共和国の運動には地理学出身者がほとんどいなかったことも一つの要因であった可能性がある。野外博物館がそのほかのヨーロッパ諸国で創出されていく過程で，地理学出身者が貢献したのか否かは今後の検証にまちたい。

最後にⅣでは，フォークライフ研究のもう

ひとつの柱ともいうべき鋤に関する研究史が整理された。この分野では，北アイルランドとアイルランド共和国の違いを越えた，エヴァンス，ダナハー，ゲイリーらの協力関係が把握された。エリクソンが指摘したように，三者が研究成果の表現手段として用いたのは分布図であった。彼らが作成したものを見れば，フォークライフ研究に地図がいかに有用であるかは明らかである。三者のなかで，ゲイリーが作成した等値線図や精巧な地域区分図ならびに商圏の図は，彼の方法がフォークライフ研究というよりはむしろ地理学的であることをわれわれに示している。

（立命館大学）

〔付記〕

本稿に用いたデータは，2002年と2008年にUniversity College, Cork（UCC）とUlster Folk & Transport Museum（UFTM）で収集したものである。ご指導とご高配をいただいたUCCのGearóid Ó Crualaoich先生，聞き取りに快く応じて下さったGeorge B. Thompson，Alan Gailey，Phillip Robinsonの3氏，ご高配をいただいたUFTMのGeorge Croweさんと Linda-May Ballardさん，そして図の作成にご協力いただいた立命館大学大学院の村上晴澄さんに衷心より御礼申し上げる。

なお，本稿の骨子は，2012年5月13日，歴史地理学会大会（新潟大学）で発表した。

〔注〕

1）アメリカ合衆国でもfolklifeの研究は行われている。例えば，Don Yodar, *Discovering American Folklife: Essays on Folk Culture and the Pennsylvanian Dutch*, Stackpole Books, 1990.

2）folklifeは“folklife”と表記される場合のほかに“folk life”もしくは“folk-life”と書かれることもある。本稿では，“folklife”と表記する。引用文に関してはこの限りではない。

3）①“Sigurd Erixon,1888-1968”, *Ulster Folklife*, 14, 1968, p.1,② Iorwerth C. Peate, “Sigurd Erixon, 1888-1968”, *Folk Life*, 6 ,1968, pp5-6. なおIorwerth C. Peate［1901-1982］は，Welsh Folk Museum（現在のSt.Fagans: National History Museum）の創設者であり，ウェールズにおけるフォークライフ研究を牽引する役割を担った。彼は，エヴァンスよりも早くthe University College of Wales, Aberystwythでh. J. Fleureの指導を受けている。

4）Sigurd Erixon, “An Introduction to Folklife Research or Nordic Ethnology”, *Folk-Liv*, 1951, pp.5-15. なお，スウェーデン学派におけるエリクソンの業績に関しては，河野眞によって日本に紹介されている。この人物名のカタカナ表記に関しては，次の文献の529頁に基づいている。（河野眞『ドイツ民俗学とナチズム』創土社，2005，pp.529-536頁，540-541頁，613頁。）

5）前掲4）p.15.

6）前掲4）p.7.このページには，以下の2文がある。「方法としての文化地理学は，地域民族学と一般民族学にとって欠くべからざるものであり，全体的な文化複合と同様に文化要素の移動に関わる新しい問題と疑問へと次第につながった。そしてさらに，それは歴史的な関係，文化形態と文化地域の間における接触・同化・交雑などと結びついた再調整へと至ったのである」，ならびに「そのもっとも重要な手段は分布図である」と述べている。このように，フォークライフ研究の唱道者であったエリクソンは，文化地理学との協力関係を念頭に置き，分布図を手段として重視していた。ダナハーは論文のなかで多くの分布図を作成している。それらにはスケールも方位も示されておらず，地理学的にはいささか不十分なものかもしれない。このようなフォークライフ研究における分布図に関して，体系的な批判が可能かと思われるが，本稿では行わない。

7）Ronald H. Buchanan, “Geography and Folk Life”, *Folk Life*, 1, 1963, pp.5-15.

8）Diarmuid Ó Giolláin, “Folklore and Ethnology” in Niel Buttimer et al. eds., *The Heritage of Ireland*, The Collins Press, 2000, pp.168-169.

9）トンプソンとゲイリーのほかにも，UFTM

にはQUBの地理学教室出身者がいた。*The Plantation of Ulster: British Settlement in an Irish Landscape, 1600-1670*, 1984の著者として知られているフィリップ・ロビンソン（Phillip Robinson）もその一人である。筆者による彼からの聞き取りによると，彼はエヴァンスの在職最終年にQUBに入学し，エヴァンスの講義を受講している。彼は卒業後にUFTMに勤務し，建築物の移築に関する業務を担当した。以上の3人の他にもQUBの地理学教室出身者はいたようである。

10）Bo Almqvist , "Introduction", in Alan Gailey and Dáithí Ó hÓgáin eds., *Gold Under the Furze: Studies in Folk Tradition, presented to Caoimhín Ó Danachair*, The Glendale Press, 1982, p.11.

11）たとえば，農家とその庭に関して形式分類をおこない，それぞれの全国的な分布図を作成している。Caoimhín Ó Danachair, "Farmayrd Forms and their Distribution in Ireland", *Ulster folklife*, 27, 1981, pp.63-75.

12）Ⅳでは，アイルランド初の野外博物館であるUFMに関して論じられる。この博物館が1964年に二つ目に公開した建物は，カウンティ・アントリムから移築された，鋤を製造するスペードミルであった。このことは，エヴァンスらが鋤をいかに重要視していたかを物語るが，それに加えて，UFMが鋤の製造経験者を雇用し，実際にそこで製造した鋤を販売したという事実を，ここで紹介しておこう。なお，スペードミルに関してはⅤで詳述される。さらに，1968年3月19日～22日に，エヴァンスはQUBで"The Spade Symposium"を開催した。このシンポジウムにおける20名の登壇者は，デンマーク，ノルウェー，スウェーデン，スコットランド，イングランド，ウェールズ，アイルランド，マン島などから来ていた。以上のことを見ても，農具もしくは土工具としての鋤は，フォークライフ研究の大きなテーマと見なされていたことは明らかである。Alan Gailey and Alexander Fenton eds., *The Spade in Northern and Atlantic Europe*, Ulster Folk Museum and Institute of Irish studies, Queen's University, Belfast, 1970.

13）前掲8）p.163.

14）Alexander Fenton, "The Scope of Regional Ethnology", *Folk Life*, 11, 1973, pp.6-7.

15）前掲8）pp.167-168.

16）Gearóid Ó Crualaoich,"The Primacy of Form: a 'Folk Ideology' in de Valera's Politics" in John P. O'Carroll and John A. Murphy eds., *De Valera and his Times*, Cork University Press, 1983, pp.47-61.

17）Bo *Almqvist, The Irish Folklore Commission, Achievement and Legacy*, University College, Dublin, 1979.

18）IFCが調査のために作成したハンドブックには"settlement and dwelling", "livelihood and household support", "communication and trade", "human life", "nature","folk medicine","time","principles and popular belief and practice", "mythological tradition", "historical tradition", "religious tradition", "popular oral literature", "sports and pastimes"などの章がある。Seán Ó Súillebháin, *A Handbook of Irish Folklore*, Singing Tree Press, 1970（1942）.

19）Kevin Danaher, "The Questionnaire System", *Béaloideas*, 15, 1945, pp.203-217.

20）Mícheál Briody, *The Irish Folklore Commission, 1935-1970: History, Ideology, Methodology*, Finnish Literature Society, 2007, p.203, pp.216-219.

21）*Skansen: Traditional Swedish Style*, Scala Publishers Ltd., 2002. Skansenは，本来的にはthe Nordiska Museet（北方博物館）の野外展示である。Skansenの設立に関しては，Sten Rentzhogが詳細に述べている。（Sten Rentzhog, *Open Air Museums: the History and Future of a Visionary Idea*, Jamtli Förlag and Carlsson Bokförlag, 2007, pp.4-32.）

22）発展途上国でもこのような施設は造られている。瀬川真平「国民国家を見せる：「うつくしいインドネシア・ミニ公園」における図案・立地・読みの専有」人文地理47-3, 1995，215-236頁。

23）Séamas Ó Catháin, *Formation of a Folklorist*, The Folklore of Ireland Council, 2008, p.356.

24）Anthony T.Lucas, “The Academic Position of European Ethnology in Ireland”, *Ethnologia Europaea*, 1, 1967, p.284.

25）Patricia Lysaght, “Swedish Ethnological Surveys in Ireland 1934-5 and Their Aftermath” in Hugh Cheape ed., *Tools and Tradition: Studies in European Ethnology presented to Alexander Fenton*, National Museum of Scotland, 1993, p.28. Lysaghtの指摘のように，財政的な問題だけがその理由であったと見做せるのか否かに関して，筆者は今のところ判断を留保する。

26）エヴァンスには本稿で引用する*Irish Heritage: the Landscape, the People and their Work*, 1942. と*Irish Folk Ways* のほかに，*Mourne Country: Landscape and Life in South Down*, 1951. *The Personality of Ireland: Habitat, Heritage and History*, 1973. など多数の著作がある。エヴァンスの業績に関しては，Brian J. Grahamによる体系的な研究がある。Grahamは，アイルランドにおけるnationalistの歴史理解とrevisionismとを対比したうえで，エヴァンスの著作はrevisionismの議論が起こる以前のものであり，その源泉となりうると評価している。また，エヴァンスは景観と“material heritage”が軋轢を生むもとになっているが，われわれはそこに居住し，宗教の信条に関係なく“total inheritance”としてそれらを活かさなければならないという強い確信を有していた，とGrahamは指摘している。そしてGrahamによれば，この確信が形となったものがUFTMである。エヴァンスの方法的な特徴は，実に精細なフィールドワーク，考古学的方法，発掘などを駆使したことである。エヴァンスは，“material artifact”に強い関心を抱き，家屋ならびに鋤の研究にも大きな業績を残している。ただ，文書史料を重視しなかったこともよく知られている。彼は，H. J. Fleureの弟子であり，Vidalianの流れに属する。（Brian J. Graham, “The Search for the Common Ground: Estyn Evans’s Ireland”, *Transactions of the Institute of British Geographers, New Series*, 19-1, 1994, pp.183-201.）

27）博物館の建設に関して，アイルランド共和国での動きを引き合いに出して政府に働きかけたことを，George B. Thompsonが述べている。（George B. Thompson, “From Corrib to Cultra”, in Trefor M.Owen ed., *From Corrib to Cultra: Folklife Essays in Honour of Alan Gailey*, Institute of Irish studies, Queen’s University, Belfast in association with the Ulster Folk and Transport Museum, 2000, p.13.）

28）UFM開設時の敷地面積は，136エーカーであった。（*Second Annual Report of the Board of Trustees, 1960/61*, Ulster Folk Museum, 1961, p.6.）

29）1967年に北アイルランド政府は，UFMと，Belfastに位置するTransport Museumとの合併を決定した。1976年にTransport MuseumはUFMの北側に移転し，現在に至っている。（George B.Thompson, *“Forward” in The Development Plan: a Feasibility Study*, 1976.）Linda-May Ballardの資料調査によると，移転後のTransport Museumの敷地面積は40エーカーである。

30）前掲20）p.296.

31）2008年に直接ご教示いただいた。

32）UFTMでの聞き取りによると，スタッフの採用面接にもエヴァンスは同席し，しかも採用側の中央に座っていた。

33）*Second Annual Report of the Board of Trustees, 1960/1961*, Ulster Folk Museum, 1961, p.7.

34）筆者は2008年にゲイリーから聞き取りを行なっている。

35）*First Annual Report of the Board of Trustees: October 1958-March 1960*, Ulster Folk Museum, 1960, p.5.

36）Emyr Estyn Evans, *Irish Heritage: the Landscape, the People and their Work*, W. Tempest, Dundalgan Press, 1942, p.113.

37）前掲36）p.113.

38）日本の地理学者で，アイルランドのフォークライフ研究による鋤に関する研究成果をおそらく最初に引用したのは，米田巌である。（米田巌「アイルランドの農村景観―ケ

ルト的世界における《agrico-pastoral complex》をめぐって―」人文地理32-2, 1980, 44頁。）なお，エヴァンスに関して，文化地理学者の久武哲也は言及している（久武哲也『文化地理学の系譜』地人書房，2000, 10頁，17頁。）

39）Jonathan Bell and Mervyn Watson, *Irish Farming: Implements and Techniques, 1750-1900*, John Donald Publisher's Ltd., 1986, pp.43-63.

40）Emyr Estyn Evans, *Irish Folk Ways*, Routledge & Kegan Paul, 1957.

41）QUBでの講義でも，エヴァンスは黒板に地図をはじめとする画像をチョークで見事に描いていたことを，筆者はフィリップ・ロビンソン（Phillip Robinson）氏からうかがった。

42）Kevin Danaher, "Some Distribution Patterns in Irish Folk Life", *Béaloideas*, 25, 1957, pp. 108-123.

43）前掲19）.

44）前掲12）ですでに言及したように，エヴァンスが中心になって"The Spade Symposium"が開催された。その報告書にエヴァンスが書いた序文では，*Irish Heritage*と*Irish Folk Ways*で用いた'one-eared type'と'two-eared type'という語ではなく，ダナハーが用いた'one-sided spade'と'two-sided spade'が使われている。用語の統一化がこの時までに行われたものと解されよう。E. Estyn Evans, "Introduction"（前掲12）p.1.）

45）Kevin Danaher, "The spade in Ireland", *Béaloideas*, 31, 1963, pp.98-114.

46）前掲45）p.101.

47）前掲45）。この論文のなかで，当時，ダブリンのアイルランド国立博物館に各地の鋤が収集・保存されていることが言及されている。

48）Alan Gailey, "The Typology of the Irish Spade"（前掲12）pp.35-48.）

49）前掲48）p.1.

50）前掲48）p.35, p.37 .p.42. "hooked"とは，柄を差し込むために口状になっている上部に近い箇所で，鉤状にまがっているタイプのものを意味し，"curved"とは屈曲した曲がり方ではなく緩やかに曲がっているタイプのものである。アルスターの東部では全く曲がっていないものが卓越しているが，コンノートの北部やアルスターの南西部では，40度ほどの角度で曲がっているものも見られる。エヴァンスによる図2の3は"hooked"であると思われる。

51）Alan Gailey, "A Family Spade-making Business in County Tyrone", *Folk Life*, 10, 1972, pp.26-46.

52）Alan Gailey, *Spade Making in Ireland*, Ulster Folk and Transport Museum, 1982. これは全体で148頁からなり，1. Irish spades and the historical spade mills，2. spade mills and some spade makers，3. Irish spade-making sites, 4. Drumnakilly spade mill, county Tyrone, 5. production at the Coalisland spade mill 1897-1920，の5章で構成されている。

53）前掲52）p.11.

54）図7に関して，左右のいずれが年長かは明示されていない。

Some Reflections on Folklife Research in Ireland: Open-air Museum and Spade

KAWASHIMA Kazuhito

This essay aims to clarify the subject and methodology of folklife research in English-speaking countries and its relationship to geography. This essay comprises three parts. The first discusses the methodology of folklife research from geographical perspective. The second focuses on open-air museums in Ireland. The third reviews achievements in the study of spades by three major folklife researchers, Emyr Estyn Evans, Kevin Danaher, and Alan Gailey.

Open-air museums originated in Scandinavia in the 19th century. In particular, the Skansen Museum in Sweden has been a model of an open-air museum for other European countries that hope to build similar institutions. In Ireland, both the Republic of Ireland and Northern Ireland developed plans for open-air museums in the 1950s and 1960s, respectively. However, the plan in Dublin was not completed due to a lack of fiscal aid from the Irish Government. On the other hand, the Ulster Folk Museum (UFM) was established in County Down by Evans and his disciples. They were folklife researchers possessing geographical ideas and techniques. Their research in vernacular houses in Ulster before that time gave impetus to their plan for an open-air museum. An open-air museum is different from folklife research; however, their scholarship helped found UFM, which thereafter has been a center for folklife research in Northern Ireland.

Folklife or regional ethnology was advocated by a Swedish ethnologist Sigurd Erixon. He supported the use of a geographical method in folklife research, for instance drawing a distribution map. R. Buchanan, a geographer, advocated "a strong bond" between geography and folklife research; both disciplines are deemed to be in a close relationship with each other.

Evans, Danaher, and Gailey analyzed the geographical distribution of types of spade in Ireland. Evans noted two kinds of spade, the one-eared and two-eared types, also discussing the fact that spade mills had supplanted country or rural blacksmiths in the manufacture of spades.

Danaher drew a map which shows the areal differentiation of spade type into three parts in Ireland. The northeastern part is dominated by two-sided spades, and in the southwestern part, one-sided spades are more used. In the rest of the country, both types of spades are used. Danaher showed that spade mills outcompeted country smiths in the 18th and 19th centuries.

Gailey processed data on spades collected by the National Museum of Ireland and other institutions to draw more detailed maps than those of Evans and Danaher. His advanced method clarified not only the geographical distribution of spade type but also the distribution of spade mills, their market area, and family histories.

We should realize that the subjects in folklife research are not limited to an open-air museum and a spade. Furthermore, we must grasp the trend in folklife research in European countries besides Ireland to discuss the relationship between folklife research and geography in perspective.

Key words: Ireland, folklife research, open-air museum, spade, spade mill